

島田妙子さん新聞記事①

父に殺されかけて知った「暴力への罪悪感が次の虐待を生む」断ち切るには…(産経新聞 2014. 6. 7)

「なんや、殴ってしまったんかいな。でも悩むことあらへん。わたしもやったことある」。

子供に暴力を振るってしまった母親を、大きく受け止める。続けて「子供に謝り。そして『めっちゃ好きやで』って言ってやり」。型破りな人生相談で母親たちを励ますのは、大阪の映像制作会社社長で兵庫県児童虐待等対応専門アドバイザーを務める島田妙子（42）。「2度死にかけた」ほどの壮絶な被虐待体験を語り、虐待廃絶を呼び掛ける講演を3年前に始めた。議員や教師、親から中学生まで、さまざまな層を対象にした講演は180回を超えた。

《3人きょうだいの末っ子だった妙子は、小学2年から約6年間、実父と継母から靴べらで殴られたり、包丁を突きつけられたりといった虐待を「ごはんを食べるのと同じように、毎日受けた」。酔った父親に包丁で脅された上、風呂の湯の中に何度も何度も顔を押しつけられ窒息死しそうになったり、首を絞められたり。次兄は小学校の修学旅行の出発日、ふとんごとロープでぐるぐる巻きにされ、旅行を断念させられた。継母のパチンコ費用ほしさの行為だった。きょうだい3人そろって車で児童相談所の前まで連れて行かれ、『あそこに行け』とポイ捨てされた」こともあった》

講演を始めたとき、妙子は「虐待をしてしまう大人も助けたい」を目標に掲げた。虐待は悪と認識しながらも、イライラして一時の感情で暴力をふるってしまう親が罪悪感にさいなまれ、それが次の虐待につながることを、実父の姿を見て知っていたからだった。

当初は、壮絶な試練を乗り越えてきた妙子に共感しながらも、「虐待する親は絶対許せない。それを助けるなんてどういうことだ」と怒りをぶつける聴衆も少なくなかった。そんな声には、ていねいに自分の考えを説明し、理解を得る努力を続けた。

《虐待は中学2年で終わった。しかし、その後の妙子の人生も平坦ではなかった。父親の自殺、障害のある長男の子育て、認知症の義父の介護…。人生の荒波が次々押し寄せた。虐待廃絶の活動を始めたのは平成23年。ともに人生を歩む“戦友”のような次兄の死がきっかけだった。それまでだれにも話さなかった「虐待の封印」を解いて、半生を振り返る自伝を執筆。同時に兄の遺言として講演を始めた。その人生と虐待廃絶への強い思いは、マスコミや講演を聞いた人たちの口コミで反響が広がり、昨年4月には兵庫県児童虐待等対応専門アドバイザーにも就任した》

「講演内容は最初のころと違ってきたんですよ」

当初は自らの被虐待体験がほぼすべてだったが、今は全体の3分の1ほど。あとは、自らの子育てやいじめ、若者気質など現代社会の課題に費やす。

「命の奇跡」「愛と信頼」「幸せのレベル」など、波瀾万丈の人生でたどりついた“真実”に特別斬新さはないが、実体験を交えた説得力のある話しぶりや、伝えたい思いにあふれた熱のこもった口調と相まって聴衆の心をグイグイつかむ。

虐待をしてしまう大人を妙子はいつしか「虐待さん」と呼ぶようになった。軽い呼び方とも思うが、そこに妙子の愛と決意がにじむ。

「お金が入ったらほしいものを買ってしまう。そうではなくて必要なものを買うべきです。幸せのレベルを上げすぎると、満足のレベルが高くなってしまう」

「受精して生まれた私たちはみんな、精子が卵子に着床するまでの数億分の一の競争を勝ち抜いて生まれた。誕生してきたことがすでに奇跡なんです」

中学生を前にこんな話をすると、生徒たちは目を輝かせ、鼻を膨らませて興奮するという。「普通に生きていること自体が素晴らしいこと。子供たちを認めてあげることが大切なんです」

次兄の死から3年半。人生の相棒の生と死を見つめるうち頭と心にあった考えが徐々に整理されていったのだった。